

夢のテンプレ
幼女転生、
はじめました。③

憧れののんびり冒険者生活を送ります

uino
ういの ill. 蒼

風の精霊王

「風」を司る精霊王。
少年のような見た目で、
いたずら好き。

おばば

エルフの辺境村の長。
庄のある雰囲気だが
優しい。

アルト

チナを保護した冒険者
パーティーのメンバー。
優しく穏やか。

ニンファ

エルフの女性。
面倒見がよく、
しっかり者。

ライ

チナを保護した冒険者
パーティーのメンバー。
無口でマイペース。

カイル

チナを保護した
冒険者パーティーの、
頼れるリーダー。

チナ

本作の主人公。
仕事帰りにトラックにひかれ、
気づくと5歳児として異世界に
転生。カイルたちに保護され、
憧れだった冒険者になる。

スラクん

チナに懐いたスライム。
最近姿を見せて
いないが……？

チナと旅する従魔たち



ミカン



シエル



ホムラ



コタロー

CHARACTERS

1

現代日本から異世界転生を果たした私、七瀬千那。何故か幼女になって途方にくれていたところを、カイルさん、アルトさん、ライくんという最強冒険者に拾われ、冒険者となった。

縁あって土の神獣であるミカン、火の神獣であるホムラ、風の神獣の子であるコタロー、先代の水の神獣であるシエルが仲間になり、さらにスライムのスラクンを含めた、たくさんの家族に囲まれて暮らしている。



カイルさんに誘われて訪れた東国から無事に帰ってきた私たち。持ち帰ったお土産を広げながら、思い出話に花を咲かせ、旅の余韻に浸る日々を過ごし、しばらくが経った。

季節は秋へと移り変わり、青々と茂っていた木々の葉が、茶色く色づき始める。鋭い日差しは柔らかくなり、熱気を伴っていた風は涼やかな秋の香りを運んできた。

もうプール遊びはできなくなるだろうことに寂しさを感じながらも、秋らしい遊びはどんなもの

があるだろうかと胸を躍らせる。

秋といえば、食欲の秋、読書の秋、芸術の秋など様々な言葉が浮かんでくる。今の過ごしやすい気候は、何をするにしても快適に楽しむことができるだろう。

落ち葉の焚き火で焼き芋するのはどうだろうか？ 山へ紅葉狩りに行くのもいいかもしれない。たまには外で読書というのも、良さそうだ。

次々と浮かぶ秋の楽しみ方に、まずは何から始めようかと思いを巡らせる。

そんな時、外から私を呼ぶ声が聞こえた。

「チナちゃん！ 庭に出ておいでー！」

室内のソファでくつろいでいた私は、なんだろうと立ち上がりウッドデッキから外に出る。

庭の中心に、身軽な格好をしたアルトさんが佇んでいた。アルトさんの手招きに従って、そちらへ向かう。

「アルトさん、どうかした？」

「そろそろ、鍛錬を再開しようと思ってる」

そういうえば、東国から帰ってきてから今日まで、ちゃんと運動していなかったなと思い返す。旅の疲れを取るという名目で、ずいぶんぐうたらと過ごしてしまった。きっと体は鈍ってしまっただろう。

私はアルトさんの言葉に頷いて、服を着替えるために部屋へ戻った。

運動に適した服に着替えて戻ってきた私は、アルトさんに駆け寄る。

アルトさんとの鍛錬は久しぶりだ。指導中は何かスパルタモードになってしまいうアルトさんは正直恐ろしいが……久しぶりの鍛錬ということで、多少は甘くしてくれるだろう。きっと……。私はそう信じている……。

久しぶりとはいえど、いつものルーティーンは変わらない。まずは準備運動からだ。

しっかりと体を伸ばし、怪我をしないように備える。今日はいつもより念入りに。アルトさんの動きを真似しながら、十分に体をほぐす。

ちなみに、準備運動には私が教えたラジオ体操もどきも含まれている。一部、曖昧だった部分は私のオリジナル体操を当てはめ「ラジオ体操・改」として、みんなに布教したのだ。

これは、現役冒険者であるアルトさんたちも「こんなに効率的な全身運動はない！」と絶賛してくれた自信作である。

入念に準備運動を終えた私たちは、早速鍛錬を始めることにした。

「よし、じゃあまずは基礎トレーニングから始めようか」

「はい……！」

意気揚々と返事をしたものの、私は、トレーニングの内容を聞いて絶望に打ちひしがれた。久しぶりだからと、甘くしてくれるような人はここにはいなかったようだ……。

アルトさんが提示した基礎トレーニングの内容はこうだ。

ルテール町の外周を十周、腕立て伏せ五十回、腹筋五十回、スクワット五十回、庭をうさぎ跳びで十周。なんとこれを十セット行うという。

はつきり言つて、バカだと思ふ。いつの間にか、アルトさんはバカになってしまったようだ。こんな、控えめに言つても地獄のメニューを、あんなに爽やかな笑顔で宣言のたまうなんて……。

アルトさんはいったい、私をどうしたいのだろう。私が筋肉ダルマになってもいいというのか！「できない……なんて、言わないよね？」

綺麗すぎる笑顔の圧が恐ろしい……。

もちろん私がアルトさんに逆らえるはずがない。特に、このスパルタモードのアルトさんには……。

とにかく、やるしかない。今のアルトさんは、限界を超えるくらいまでやらないと満足してくれないことは、これまでの経験により理解している。

もう、なるようになれ！ という気持ちで、私は先導するアルトさんについて走り出した。

ルテール町は、中に魔物や犯罪者が侵入しないようにぐるりと壁で囲まれている。そのため、まずは門から出なければいけない。

町中でスピードを出しすぎては住民の迷惑になるため、今はまだ軽い駆け足だ。アルトさんにいったつては、ほぼ歩いているようなものである。

「あらチナちゃん、お兄さんとお出かけ？ 気をつけるのよ」

「今日はアルトの坊主と一緒に。帰りに寄つてつてくれよ！」

「アルト兄ちゃん！ 今度、俺にも稽古けいこつけてくれよ！」

町では、この一年半で仲良くなった主婦のおばさんや、肉屋のおじさん、アルトさんを慕う駆け出し冒険者の少年が声をかけてくれる。

駆け足程度では息切れしなくらいには鍛えている私は、笑顔でみんなの声に応えながら、門へ向かった。

無事に門を出たら、ここからが本番だ。

これから、この壁に沿って町の外周を十周……。考えるだけで気が滅め入る。なるべく思考を無にして、ひたすら走ろうと心に決めた。

私にとっては全速力の一步手前、アルトさんにとっては軽い駆け足のスピードで壁の周りをぐるぐる。どこまで行つても変わらない景色に、だんだん嫌気が差してくる。

門の前を通るたびに声をかけてくれる門番さんたちの優しさが、心に染みたま……。

走り始めてからどれくらい時間が経つただろう。せつかく涼しくなってきたというのに、今の私は真夏のように汗だくだ。

今ほど水魔法を使えて良かったと思えた日はない。飲み水にもなるし、水球に顔をつつこめば一

気にさっぱりする。……さすがにこれは、アルトさんのドン引きのまなざしを浴びたので自重することにした。

そんなこんなで、なんとか十周を走り終えた私は、疲労困憊けんぱくの体を引きずって家に帰り着いたのだった。

ちなみにアルトさんは、疲れなんてちらりとも見せずに今も爽やかな姿のままである……。

「もう、むり……!」

降りのはんびり歩いたとはいえ、昼過ぎから夕暮れ時まで走り続けていた私の体は限界を迎えていた。

家に辿り着いた途端、安心感で気が抜けてしまった私は、庭先にバタンと倒れ込む。もう一步も動ける気がしない。

おどろい茜色に染まった空が徐々に色をなくしていく様子が、私の心情と重なるようだった。

「今日はもう無理そうだね……!」

残念そうに呟くアルトさんに恐怖を感じる。私に体力が残っていれば、まだ続ける気だったのだろうか……。

あれだけ走ってもケロツとしているアルトさんの格の違いを、改めて感じた。きつとアルトさんにとつて、もちろんカイルさんやライくんにとつても、あれくらいなことない距離なのだろう。私が三人に追いつける日が来る気がしない……。

「ほらチナちゃん、寝ちゃう前にちゃんと体をほぐしてお風呂に入らないと」

そう促されても起き上がる気配のない私に、アルトさんが強硬手段を取った。

脇を抱えられて体を起こされた私は、アルトさんにされるがまま。グニヤングニヤンで力の入っていない私を手取り足取り……強制的にストレッチをさせられた。スパルタモードは終了したのか、ほど良く体が伸ばされて気持ちいい。

ストレッチが終わったら、そのまま抱きかかえられてお風呂場まで連れていかれた。

「……今のチナちゃんを一人でお風呂に入れるなんて心配だな。一緒に入る?」

「はいんないよ!」

本気とも冗談ともつかないアルトさんの発言に、思わず即答した。

歩くことすらままならない私を一人でお風呂に入れることに不安を感じるのとは分かる。転んだり溺なほれたりしたら大変だからね。

だからといって、アルトさんと一緒に入るなんてできない。私の幼児体型を見られることには特に羞恥しゆうちは感じないが、私がアルトさんの体を見るのは問題があるだろう。

私には成人女性だった時の記憶があると知っているはずなのに、何を言い出すんだこの人は。頬を赤く染めて動揺していると、アルトさんは冗談だと言って楽しそうに笑出す。

しかし、実際問題、今の私が一人でお風呂に入るのとは良くないだろう。うっかり寝てしまつて溺れでもしたら目も当てられない。

そこで、アルトさんは監視役としてミカンを呼んだ。

毛を濡らしたくないらしいミカンにとってはいい迷惑だろうが、私の安全には代えられない。アルトさんは扉の前で待機して、ミカンが叫んだら駆けつける、ということだ。

少し大きな気がしなくもないが、今の私の状態を見れば仕方がないか……。なんせ、立つ力すら残っておらず、今は脱衣所に座り込んでいるくらいだからね……。

そんなこんなでミカンの監視つきでお風呂に入った私だったが、何事もなくまったりと温かい湯で疲れを取ったのだった。

まぶたとまぶたが今にもくっついてしまいそうなのを必死に堪えてお風呂から上がると、アルトさんが私の部屋まで連れていってくれた。

布団に寝かせると、アルトさんは私にマッサージをしてくれる。ほど良い力加減で全身を揉みほぐされ、私はあつという間に眠ってしまった。



目を覚ました時には、もう外は明るかった。夢を見ることもなく、ぐつぐつと眠っていたようだ。布団の上から窓の外をボーッと眺めていると、突如ぐうぐうと情けない音が鳴り響く。夕飯を食

べ損ねたせいとか、ものすごくおなかが空いているようだ。

とりあえず、着替えるために体を起こそう、と思ったが……。

「あれ……?」

びつくりするほど、体に力が入らない。それどころか、全身がものすごく痛い。

……この痛みは知っている。筋肉痛だ。昨日は疲れて体を動かせなかったが、今日は痛みで体を動かせないようだ。

久しぶりの運動だったのに無茶な距離を走ったためか、足だけでなく、腹筋も背筋も、腕すらもひどい筋肉痛になっていた。

体は動かせないがおなかは空く。ついでに言えば喉もカラカラだ。

やむを得ず、ミカンに誰かを呼んできてもらおうと思っていると、ちょうど扉をノックする音が聞こえた。

「……チナちゃん、起きてる?」

そろっと扉を開けて中に入ってきたのはアルトさんだ。

アルトさんは動けず涙目になっている私の姿を見て、やっぱりな、という様子で苦笑いを浮かべた。

「昨日の様子から、きつとこうなっていると思ったよ。今日の鍛錬はお休みだね」
どうやらアルトさんにはお見通しだったらしい。

アルトさんはそつと気遣うように私を抱き上げ、リビングまで連れていってくれた。

「おう、チナ。おは……どうした？ 怪我したのか？」

リビングにはソファでくつろいでいるカイルさんがいた。

ぐったりした様子でアルトさんに抱き上げられる私を見て、怪訝けげんそうに顔をしかめる。

「ただの筋肉痛だよ。昨日、少し厳しくしすぎちゃったみたい」

アルトさんの認識からすると、これはただの筋肉痛で、あれは少し厳しいくらいだったらしい。

私としては、ひどい筋肉痛で、とても厳しかったように思うが……。アルトさんはナチュラルに厳しいらしい……。

そんなアルトさんを、カイルさんは呆れたように一瞥いちべつした。

「チナ、嫌なことはちゃんと嫌って言えよ……」

「……はい」

どうやらカイルさんの認識は、私と同じようだ。カイルさんがアルトさん寄りの思考じゃなくて良かった……。

しかしカイルさんは、私がアルトさんの庄に逆らえないことを知らない。拒否できるならとつくにしています。



その後、アルトさんは一日献身的に私の世話を焼いてくれた。

基本的には私に甘いアルトさん。ほんと、なんで鍛錬の時だけあんなに鬼になるんだろうか……。

アルトさんのお世話の甲斐あってか、翌日の私は筋肉痛が治まりピンピンしていた。きつと、私の体が若いことも回復の理由だろう。……若いつて素晴らしい。

元氣いっぱい私を見て、アルトさんも安心してくれたようだ。

「良かった。今日はビシバシいけるね！」

その一言で、私の心は不安でいっぱいになったが……。

アルトさんに引きずられるようにして庭へ出た私。体は回復したとはいえ、心の準備はまだ全然できていない。

戦々恐々としている私に対して、アルトさんはやつと鍛錬ができるとウツキウキである。

私は、アルトさんがやりすぎないよう祈るばかりだ。

「さて、今日も基礎トレーニングをしようか」

うう、胃がキリキリしてきた……。

「ははっ！ そんな怯おそえた顔しないでよ。大丈夫、もうやりすぎないように気をつけるよ。……カイルにも言われたしね」

どうやらカイルさんにお小言をいただいたらしい。アルトさんがほんのりしなびているように見

える……。

カイルさんのおかげで、アルトさんのスパルタ加減は若干落ち着きそうである。ひとまずは安心だ。

まずは準備運動と、ウォーミングアップとして町の外周を一周走るよう指示された。

念入りの準備運動を終えて、外を一周。

今日は一周で終えたが、なんだか一昨日の一周目よりも楽に走り終えられたように感じた。筋肉痛を乗り越えて、筋力が上がったのだろうか。大変な思いをした分、力になっていると実感できてモチベーションが上がってくる。

あまり疲れを感じずにはど良く体を温められ、気分も上向いてきた。

「まずは腹筋、腕立て伏せ、スクワット。それぞれ三十回ずつで一セットね。それを……とりあえず、五セットやろうか」

「はいっ！」

本当にトレーニング内容の見直しをしてくれたらしい。カイルさん、本当にありがとう……！

私は意気揚々と芝生の上に寝転がり、腹筋を始める。アルトさんも隣に並んで一緒に。

アルトさんは横目で私の姿勢を確認して、時々アドバイスをくれる。アルトさんの言う通りに直してみれば、変なところに入っていた力がスッと抜け、腹筋への負荷が大きくなったように感じた。すごい……。

姿勢が崩れれば指摘され、時には補助もしてくれ、私は黙々とこなしていった。

「はあ、おわったあ〜」

最後の一回まで気を抜かずやりきった私は、両手を天に掲げ、そのままパタンと後ろに倒れ込む。

筋肉はプルプルと震えているものの、まだ限界は迎えていない。このまま終われたら、きつと気持ち良く眠れることだろう。明日の筋肉痛もほどほどで済むはずだ。

「チナちゃん。休憩したら、次は素振りだからね」

まあ、これだけで済むはずはないのだが……。

「チナ、お疲れ様です」

青い空を見上げる私に、ミカンがタオルをくわえて差し出す。どこからか見ていたらしい。

タオルを受け取った私は、反動をつけて体を起こし、じんわりにじみ出る汗を拭う。タオルはひんやりと湿っていて、気持ちいい。そのまま顔を覆うと、体にこもっていた熱がスウツと引いていった。

「ありがとう、ミカン。サッパリした」

アルトさんにもタオルを渡して戻ってきたミカンにそう言うと、機嫌良さそうに尻尾をゆらりと揺らした。

柔らかい風を自分とアルトさんの方へ送り、扇風機のようにして涼んでいた私は、ふと、ミカンが私越しに何かを見ていることに気がつく。

何かあるのかと思ひ振り向くと、そこには、一心不乱に腹筋を続けているライくんがいた。「うわ、びっくりした！」

ライくんがそこにいたことにも驚いたし、ライくんが筋トレをしていることにも驚いた。

ライくんはあんまり筋肉を鍛えているイメージがないから、こんな姿を見るのは珍しい。というか、初めてかもしれない。実は密かに筋トレしていたのだろうか？

あ、腹筋終わった。と思つたら、素早く腕立て伏せに移行する。

頭から爪先までピンとまっすぐで、地面に胸がつくギリギリまで腕を曲げる。体を持ち上げる動作も危なげなく安定していた。まさにお手本と言える姿だ。

その後はスクワット、そしてまた腹筋に戻る。私がやっていたのと同じメニューを行っているようだ。ただ、回数を増やして。

無表情で黙々と行っている姿は、なんだか筋トレというよりも作業をしているように見える。さすがのタフさだ。

それより、ライくんは何故、気配を消して筋トレをしているのだろうか……？

「チナちゃん、そろそろ休憩は終わりだよ」

ライくんをじつと見ていた私は、アルトさんの声でハッと我に戻る。

何故かライくんも動きを止めて立ち上がった。

「じゃあライ、お願いね」

なるほど、ライくんはアルトさんが呼んでいたのか。

今、私が使っているのは短剣だ。ライくんと同じ戦闘スタイルである。アルトさんは片手剣使いだから、その素振りをするんだと思っていたが違ったらしい。

ライくんは無言で頷いて、私に練習用の短剣を二本手渡した。

ライくんの教えは基本を忠実に、だ。毎回、持ち方から確認する。順手と逆手、その切替まで。

念入りに正しい持ち方を確認したら、ようやく素振りだ。最初はゆっくりと、徐々にスピードを上げていく。

的確に相手の急所を狙うために、軌道がブレないよう体幹も大事だ。体幹が弱いと判断されればアルトさんに引き渡され、地獄の体幹トレーニングが始まるので私も必死である。普段から体幹を意識しているかどうか、ここに出るのだ。

素振りは久しぶりだからか、少し大目に見てくれているようだ。

鍛える、というよりも確認する、というイメージの方が正しいかもしれない。

集中して何度も同じ動作を繰り返して、ライくんに正してもらいながら勘を取り戻していく。

そんなふうに夕暮れまで素振りを続けて、今日の鍛錬は終了した。

「今日はよろしくお願いしますー!」

元氣いっぱい挨拶をするのは、今年冒険者になったばかりの少年二人。どちらも十歳前後と
いったところだろう。憧れのカイルさんたち三人を前に、目をキラキラと輝かせている。

今日は、ギルド裏の広場で新人講習会である。どうやらこの町では、先輩冒険者たちが順番に、
新人たちに一日指導を行っているらしい。

去年は新人が私一人だった上に、保護者がカイルさんたちなので、日常的に最高級の指導を受け
ているということで免除されていたようだ。全然知らなかった。

そして、何故か今年組に交ぜられる私。まあ私は、今回のカイルさんたちの講習にしか参加しな
くていいらしいのだが……。

「今回の指導担当であるカイル、アルト、ライだ。今日は一日よろしく!」

カイルさんの挨拶に合わせてアルトさんはフランクに手を振り、ライくんはペコリとお辞儀じぎ
する。

私と並ぶ新人君たちは、三人が動くたびに大げさなほど喜びの感情を溢れさせていた。今からこ

の調子で、一日持つのだろうか……?

「さて。お前たちはもういろいろな先輩冒険者たちに指導を受けていると聞いている。これまで、
どんなことをしてきたのか教えてもらえるか?」

「はい! 森に行つて、魔物の討伐をしました!」

「はい! 野営の準備から実践まで、ひと通り教えてもらいました!」

カイルさんの問いかけに元氣良く答える二人。楽しかったことも、しんどかったこともあったと
一生懸命に伝える。

「そうか。実践的なことが多かったんだな。……では、今日は最も基礎的なこと、体の鍛え方を教
えようと思う」

「おおー!」

いちいちリアクションが大きくて、なんだか面白くなってきた。

「じゃあ、早速やっつけていこうか。まずは準備運動からだ!」

まずは、新人の二人がいつものような準備運動をしているのかの確認からするらしい。私もカ
イルさんたちに交じって見ていたが、それは準備運動とは言えないような杜撰ずさんなものだった。

「お前たち、準備運動はなんのためにするのか知っているか?」

カイルさんがそう問いかけると、二人は分からないといったように眉を寄せて首を傾げる。もし
かしたら、今まではまともな準備運動すらしたことがなかったのかも知れない。

その様子を見たカイルさんは、二人にも分かるように丁寧な言葉で説明する。

「準備運動には、いくつかの効果がある。一つは、怪我の予防。まずは軽く体を動かして、筋肉や関節をほぐす。そうすることで筋肉や関節に大きな負担がかからないようにするんだ。お前たちもいきなり後ろから話しかけられたら、びっくりするだろ？ それと同じで、いきなり激しい運動を始めると、体がびっくりして変なところを痛めることがあるんだ。そうならないように、体を整えるための軽い運動が、準備運動だ」

「他にも、体を温める効果があるね。体温が上がると、体の動きがスムーズになって息切れや疲れも感じにくくなるそうだよ。あとは、今から体を動かすんだぞ、つて心の準備をする時間にもなるね」

カイルさんに続くように、アルトさんが説明する。

真剣に頷く二人の横で、私も密かに「なるほど」と感心していた。あまり意識したことはなかったが、確かにその通りだと思ったのだ。

私にとつては、これからアルトさんのスパルタ指導が始まるんだ……という心の準備をする時間でもあったんだな……。

「ということでは、まずは正しい準備運動の仕方から教えていこうか」

ライクんの動きをお手本に、見様見真似で体を動かす二人。そんな二人に、気をつけるどころや意識するところを伝えるカイルさんとアルトさん。

私はすっかりできていたらしく、アルトさんをちらと見ると「うん」と頷いて二人の指導に戻っていった。

「体が硬いな。今後は人に背中を押してもらったり腕を引っ張ってもらったりしながら、体を柔らかくしていくように。体が柔らかければ、怪我をしにくくなるだけじゃなく、体の可動範囲が広がり、できることが増えるからな」

「はー」

二人とも柔軟は不得意だったらしく、ガイガイと背中を押される少年たちの悲鳴が響き渡る。

涙目の二人を前におなかをべったりと床につける前屈を披露した私に、少年たちは恐れおののき何故か「姉御」と崇め、懐いてしまった。

カイルさんたちと常に一緒にいることで嫉妬とかされたら面倒だな、と思っていたのだが、どうやら私の心が穢れていたらようだ。子供たちの純粋なまなざしが眩しい。

その後はジョギング、筋トレを行っていく。最初は無理のない程度に、日によって鍛える箇所を変えて、少しずつ回数を増やしていくのがおすすめらしい。

私も最初の頃はこうだっただろうか。アルトさんの普段のスパルタ具合と比べると、天国と地獄と言えるほどの差だ。私も毎日これがいい。

そんなことを考えているのがバレたのか、アルトさんの視線がキツときつくなったのを感じた。恐ろしい……。

最初は腹筋一回すらままならなかった少年たちも、懇切丁寧に教え込まれた成果か、最後には五回ほどできるようになっていた。

私は少年たちのやる気を削がないよう、わざと動作をゆっくりゆっくりとしたせいで、筋肉に普段以上の負荷がかかったのだった。中途半端な姿勢で止めるの、キツイ。

最後まで集中して頑張っていた少年たちはもうヘトヘトだ。疲れきった顔をしながらも、最後のストレッチからマッサージまで集中して説明を聞いて実践していた。

普段使わない筋肉を使ったらしい少年たちは、この時間を至福の時のように感じていたらしい。顔が溶けている。

ひと通りのメニューが終わり、最後に質疑応答の時間が設けられた。

「最後に、何か聞きたいこととか、分からなかったことはあるか？」

カイルさんがそう質問すると、さっきまで疲れきっていた様子だった少年たちが急に生き生きとし始めた。

「はい！ 今日のトレーニングを毎日続ければ、カイルさんみたいになれますか！」

「そうだな……。本人の資質もあるが、少なくとも今より確実に強くなるだろう。筋肉のつき方は人によって違うから、目に見えて変化がなくても落ち込まないように。継続は力なり、だぞ」

「ありがとうございます！ 頑張ります！」

「俺もいいですか!？」

「おう、なんだ」

「えっと、皆さんも、こういったトレーニングをコツコツ続けて強くなったんですか？」

「強くなった方法は人によって違うだろう。だが、毎日強くなるうと頑張っていたことは一緒だ。

強いと言われる人たちはみんな、諦めずに続けてきた人たちばかりだ。時には挫折ざせうすることもあるだろうけど、必ずもう一度立ち上がって、一から鍛え直す。それが、自分の力になると信じてな。

たまには休んでもいい。だが、それで終わりだと思わずにもう一度立ち上がる努力をすることを覚えておいてくれ」

「分かりました！ ありがとうございます！」

その後もいくつかの質問と回答が繰り返された。こんな機会は滅多めったにないので、聞きたいことは全部聞いてしまおう、と意気込んでいる様子だった。

私はその様子を、元気がいいなあ、と近所のおばさん目線で見守っていた。

質問が「恋人はいますか？」「好きな食べ物は何ですか？」と変な方向に逸れてきた辺りでカイルさんは切り上げ、締めめの挨拶に入る。

「俺たちは同じ町で活動する冒険者だ。見かけたらいつでも声をかけてくれていいし、聞きたいことがあればいつでも聞いてくれ。……これで講習会は終了だ。君たちの今後に期待しているぞ！ それじゃ、解散！」

「ありがとうございます！」

講習会は無事に終わった。体力的にはまだまだ余裕のある私だったが、なんというか、気疲れがすごい。

少年たちのパワフルさには、さすがの私も驚かされた。体力面では、まだ冒険者になったばかりの少年たちに負けるつもりはないが、テンションの高さと元気の良さにはどうにもついていけない気がする。どこからあんな気力が湧いてくるのだろうか……。疲れきった様子だったのに、少し休憩しただけで、元の元気の良さに戻っていた時には恐怖すら感じた。

「チナちゃん、同年代……というには少し年上だけど、年の近い子たちとの交流はどうだった？」

「つかれた……」

私のぐったりした様子を見て、アルトさんは苦笑を浮かべる。私の心情を分かってくれているのだろうか。それとも、一瞬で少年たちの親分的存在になってしまったことに、同情してくれているのだろうか……。

ただ誰よりも体が柔らかいという、その一点だけであんなに慕われるとは。誰にとっても予想外だったに違いない。少年たちの尊敬ポイントが分からない。何故、姉御……。私、年下……。

しかし、今日の講習会に私が参加させられたのは、子供同士の交流が目的だったとは。

確かに私には、東国で出会った椎花ちゃんしか友達と呼べるような存在はいない。その椎花ちゃんも、私と遊べる歳ではないし、いつでも会える場所にいるわけではないから、アルトさんなりに心配してくれたのだろう。友達がいない、ボッチの私を。

この町は子供が少ない上に、私は自分から積極的に彼らと関わろうとしなかったから、私に友達がいないのは当然だ。

それに、私は自分を異質な存在だと認識している。違う世界で大人まで生きた記憶を持っており、魔力も、身体能力も、一般的な子供とはかけ離れているだろう。そんな私に、同年代の友人なんて果たして必要なのだろうか……？

「でも、楽しかったでしょ？」

……まあ、知り合いくらいは作っておいてもいいのかもしれない。



「姉御！ ちわっす！」

「しようねん、きょうもげんきだね」

あれから、町を歩けばどこからともなく少年たちがやってきて声をかけてくるようになった。カイルさんたちには、憧れの気持ち強いのか気軽に話しかけるのは気が引ける様子だ。目を輝かせて、腰を九十度に曲げた綺麗なお辞儀を披露する。

まだ午前中だというのにどこかへ冒険に行ったのか、少年は膝に擦り傷をこさえ頭に落ち葉をくつつけている。気分の良かった私が気まぐれにそつと頭の落ち葉を払うと、照れたように「あ

ざつす」と微笑む少年。その姿になんだか可愛げを感じて、もはや私は近所のおばちゃん目線である。

「姉御はこれからおでかけっすか？」

「うん、そうだよ」

「そつすか！ 楽しんできてください！」
いつもよりいくらかニコニコ愛想のいい私に、少年は首を傾げながらも大きく手を振って見送ってくれる。

私は「少年の名前、なんだっけ……」という、もう何度目になるか分からない疑問を思い浮かべながらも、ルンルンと心を躍らせ目的地向かうのだった。

ことの始まりは、今朝のことである。

不思議といつもより早い時間に目覚めた私は、キッチンに立ってせっせと何かを作っているアルトさんを目撃したのだ。

「アルトさん、なにしてるの？」

眠い目をこすりながら聞いかけると、アルトさんは顔を上げて、いい笑顔で言った。

「お弁当を作ってるんだよ。チナちゃん、今日は紅葉狩りだよ！」

——紅葉狩り。

その言葉で眠気など吹き飛んだ私はウキウキと心を弾ませ、カイルさんを叩き起こし、ライくんはカイルさんに起こしてもらい、せっせと出かける準備を始めたのである。

その甲斐あってか、予定よりも早く出発することのできた私たち一行。従魔も含めて、総勢七名。ルンルンの私を先頭に、森へ向かってせっせと町を横断中だったのだ。

少年と別れて門を抜けると、赤や黄色が入り乱れる森が目に入る。鮮やかに染まった木々が非日常感を演出し、どこか別の世界にやってきたように錯覚した。

家の裏の森とそう変わらぬのだが、有頂天の私は、初めて見た景色のように感動した。
いつまでも立ち止まっているわけにはいかないので、促されるまま私は森に向かって歩みを進める。近づくほどに圧倒されるその美しさのため息をこぼし、早くあの木々の下を駆け回りたいと、無意識に歩調が速くなっていく。

ようやく森の入り口に辿り着き、一歩足を踏み入れる。そこから先は赤と黄色の落ち葉でできた絨毯が広がっているのだ。地面を踏みしめるたびにサクサクと気持ちいい音がして楽しくなった私は、コタローと一緒に駆け出した。

何度も訪れたことのある森なのに、葉の色が変わるだけでこんなに違った景色を見せてくれるかと、新たな感動を味わう。

自然の美しさに、圧倒されるばかりだ。

自由に動き回っているようで実はカイルさんたちに誘導されていた私は、気づけば森を横断する川を渡っていた。

浅いが幅の広い川。

普通なら、防水ブーツを履くか、川を渡った後に靴を履き替える必要があるが、魔道具のアクアヴェールのおかげでそんな手間は不要である。地味な活用方法ではあるが、これを思いついた時は自分は天才ではないかと疑ったものである。

そんな余談は置いておいて、この川を越えると魔物の危険度がぐんと上がる。いささか紅葉狩りには不適切な場所ではないかとも思うが、今日はカイルさんたちだけでなく従魔たちも一緒なので問題ないだろう。いざとなれば私の結界もある。怪我をしたくないあまりに他の魔法より必死で練習したから、精度は完璧だ。

川からさらに進んだところで、カイルさんたちが立ち止まった。どうやら、目的地に到着したようである。

「おいら、ちょっと探検に行ってくるぞ！」

止める間もなく駆けていったコタローには、やれやれといった様子のシエルがついていったので大丈夫だろう。

荷物を広げるカイルさんとアルトさんを横目に、私はライクんと一緒に綺麗な落ち葉やどんぐり拾いに精を出す。ホムラは空を悠然と飛び回り、ミカンは木の上にもちようどいい寝床を見つけてお

昼寝をしていた。

あまり遠くへ行かないように気をつけながら地面とにらめっこをしていた私は、アルトさんの呼ぶ声に腰を上げ、振り返る。

そこには、大きなシートに小さなテント、普段の冒険には絶対に持っていないような折りたたみチェアやテーブル、ハンモックなんかも準備され、くつろぎ空間が出来上がっていた。どこかのグランピング場かと思うほどである。カイルさんが山ごもりでもするのかというレベルの大荷物を背負っていたのも納得だ。

美しい紅葉に、美味しいお弁当。心地よい風に身を任せ、のんびりまったりくつろぐ。時間がゆっくりと流れているようだ。

少し離れたところに魔物の反応を感じるが、さしたる問題ではない。

コタローとともに戻ってきたシエルが、アルトさんに耳打ちしている様子を目の端で捉えながら昼寝でもしようとした、その時。

「さあ、チナちゃん。鍛錬の時間だよ」

私を絶望に突き落とすアルトさんの声が聞こえた。

大自然の風を感じながら、贅沢ぜいたくに整えられたこの空間でまったりしようとした矢先に聞こえてきた「鍛錬」という言葉。

一瞬、幻聴かな、と思うほど場違いなその言葉は幻聴でもなんでもなく、柔らかな微笑みを浮かべるアルトさんから発されたものに間違いはなかった。

なんでもないことのように言ったアルトさんは、実際、普段の様子と全く変わったところはない。まるで、こんなふうなように言ったアルトさんは、実際、普段の様子と全く変わったところはない。まるで、こんなふうなように言ったアルトさんがおかしいと言わんばかりの態度で、動き出す私を待っている。

今朝の、突然「紅葉狩りに行く」と言い出した時の姿と今の姿が重なったように思えたその時、アルトさんの微笑みの奥にほんの少し「してやったり」とでもいうような、いたずらっぽい表情が見えた気がした。

……アルトさんは、初めからそのつもりで私を紅葉狩りに連れ出したのだと、確信した。

「ほら、行くよ？」

アルトさんの視線から逃げるように、助けを求めて周囲を振りあげろ。しかし、私に救いはなかった。

ミカンの近くに陣取って、木の上でお昼寝を始めてしまったライくん。ハンモックにゆらゆらと揺られて、私とは正反対の方を見ているカイルさん。どこまでも自由奔放なホームラとコタロー。シエルにいたってはアルトさんのそばに控えて、初めから私につく気はないという姿勢だ。

もしや、みんなグルだったのか……？ と勘ぐっても仕方がないだろう。

ここで駄々をこねてもどうにもならないことは分かっているのに、なんだか素直に動く気になれ

ない。

こんな、騙し討ちみたいなやり方はひどいのではないだろうか。楽しかった気持ちが一気に急降下した私はやさぐれモードである。

途端にむすーっとし始めた私に、アルトさんは焦り始めた。

「チ、チナちゃん……？ ほら、今日は鍛錬って言っても、魔物討伐だから！ 久しぶりの実践だよ？ ……チナちゃんのかっこいいところ、見たいなく？」

自分でも騙し討ちをした自覚があるのか、必死にテンションを上げようとするアルトさん。

それでも頑として動かず、目も合わせない私に焦れたアルトさんは、私の腕を引くという強硬手段に出た。

「アルトさん」

「……はこ」

その腕を引っ張り返してアルトさんを振り向かせ、静かな声で呼びかけると、さすがにまずいと思っただのか、これまで聞いたことのない弱々しい声が返ってきた。

「あのね、たしかにわたしはたんれんをいやることもあるけど、にげだしたことはないでしょ？」

「そうだね……」

「わたしがにげまわってるならわかるけど、そうじゃないのにこんなだましようちみたくないことをするのほひどいとおもっ」



「ごめん……」

「こういうのはもうやめてね？ たのしいサプライズはすきだけど、こんなかたちでたんれんはしたくない」

「うん、分かった。……ごめんね？」

本気で反省している様子のアルトさんを見て、私は溜飲くちくちんを下げる。

俯うつむいてしまったアルトさんを、今度は私が引っ張った。先導はシエルがしてくれるようだ。

「ほら、きりかえていくよ！」

につこり笑って見上げると、アルトさんも笑みを浮かべる。手は繋いだまま、今度は並んで歩き出した。

私にしてはあっさりと引き下がったのには、理由があった。一つはもちろん、アルトさんがちゃんと反省している様子で、もうこんなことはしないだろうと思えたこと。

それと、実はずっと気になっていることがあったのだ。

——まるで、順番待ちをしているように絶妙な距離を保ったまま集まっている、数種類の魔物の気配だ。

決してお互いに認識できない位置にいなながらも、これだけ近いところにこれだけの数の魔物が集まるなんて、自然ではほとんど見られない行動だろう。それも、なんだか弱い魔物順に並んでいるようで……。

こんなこと、アルトさんやカイルさんだつてできない。できるとすれば……神獣くらいなものだろう。そして、今私たちをその魔物のところまで案内しているのは、元神獣であるシエルだ。

シエルは器用にも、神獣特有の威厳溢れる気配を完全に消している。私から見ても、今のシエルはただの弱々しい動物のようにしか感じない。ここまで抑え込めるのは、さすがと言うほかない。

そんなことを考えているうちに、魔物が見えるところまでやってきたようだ。促されるままに木々の陰に隠れ、討伐対象を観察する。

ここから目視できる距離にいるのは、額に角を生やしたツノウサギの一種、コルピッドだ。その数、十二羽。

コルピッドは、鋭い角を持っているが攻撃の威力はさほど高くない。額の角はあくまで「窮地に追い込まれた際の最後の防衛手段」といった役割らしい。その代わりというように、回避能力は他の追隨を許さないほど優れている。

最もやかいなのは、頭上で主張している大きな両耳だ。

あの大きな耳で、どんなに小さな音も即座に拾い上げる。そして、僅かな音の違いを聞き分け、自分に害を為す可能性があると分かればすぐさま逃げ出してしまふのだ。

体の小ささと素早い動きも相まって、一瞬目を離したらいなくなっている、なんてことも珍しくない。そもそも、見つけることさえ難しい魔物である。

今も私たちは、ギリギリ目視できる位置にいながらも、息を殺すようにして身を潜めている。こ

こから先は、ほんの僅かでも音を立てることは許されない。

さて、そんな魔物をどうやって討伐するのか。一番確実なのは、ここから魔法で狙い撃ちしてしまふ方法だろう。魔法を使うのに詠唱を必要としない、私ならではの方法である。

しかし、私の魔法の精度はまだまだ甘い。不規則に散らばる十二羽のコルピッドに、同時に魔法を的中させられるかどうかは五分五分といったところか……。そんな不確実な方法は採りたくない、というのが正直なところだ。

ならば、他にいい方法はあるだろうか……。？ 声も出せないこの状況では、アルトさんにアドバイスを求めることだつてできやしない。

どうすればいいか、何か使えるものはないか、と視線を巡らせていた私は、ある一点で視線が止まった。

それは、今もなお気配を消し続けているシエルだ。気配どころか、存在そのものまで希薄な姿に、数日前のある光景が重なった。

その日、私は久しぶりに植物図鑑を引っ張り出して、森の雑草の種類を調べていた。

ギルドで買い取ってくれるような薬草の種類は覚えていても、ただの雑草なんて普段から意識しているものでもなく、時々こうして確認しておかないとあつという間に忘れてしまふのだ。

最初の頃は雑草の種類なんて覚えて何になるんだ、と思っていた私も、今では自ら復習するくら

いには雑草に關心を持っている。

「括弧に「雑草」といっても、実は解毒作用を持つていたり、傷の治りを早める成分を持つものだってある。それに、意外と美味しいものもあつたりするのだ。」

傷は魔法で治せるとはいっても、そればかりだと自己治癒力が低下しそうで怖い。だから私は、緊急時や大怪我の時以外はできるだけ自然治癒に任せることにしている。

そんな時に役に立つのが雑草たちだ。どこにでも生えている雑草なら、その場で即席の傷薬が作れる。野営時の食料にだってできる。

知れば知るほど自分たちの役に立つ雑草たちに、私はどんだのめり込んでいったのだ。

ちなみに、何故そんな役に立つものが売れないのかというと、どこにでも生えているせいで買人がいないからだ。買うくらいなら自分で摘んでくる。それが手間にならないほど、少し歩けば見かけるようなものだ。

雑草に興味津々の私は、どこかに自分の知らない雑草はないか、レア雑草はないか、など集中して調べていた。それはもう、前のめりになりすぎて地面に突っ込みかけるくらいに。

そんな私は、周りの様子など見ていないように思えるかもしれないが、実はそんなことはない。

火山での失敗——気を抜いて周囲の確認を怠ったために、本来、人がいるはずのない場所から出てきた姿を目撃されたこと——から、どんな時でも周囲の警戒は怠るべきではないという教訓を得た私は、無意識下でも気配察知を切らさないよう訓練を重ね、見事にそれを習得したのである。

つまり、雑草にのめり込んでいる状態であつても、周囲では何が起きているか敏感に感じ取つていたので。——南西、十五メートル先の木の枝に止まつていた小鳥が飛び立ったことすらも、私には認識できていた。

だというのに、何が起つたのか。

気づかないうちに、私の背後一メートルにまで入り込んできた存在がいた。

私が気づいたのは、肩を叩かれ、声をかけられた時だった。

「……何してるの??」

ぼんやりとした、緊張感のない声だ。

しかし、いつの間にかここまで近づいていたのか、全く感じられなかった。私は思わず飛び退る。突然人が現れたという驚きと、それに気づけなかったことに対する自分への失望で呆然とする私の前に立つていたのは、ライくんだった。

「凶鑑……。勉強……?」

さっきまで私が座り込んでいた場所に残された植物凶鑑に目を留めたライくんは、それを拾い、ペラペラとページをめくる。

暗殺者に育てられた過去のあるライくんにとって、それは見慣れたものだろう。雑草の中には、使いようによつては人を殺せるものだってあるんだから。

眺めるようにペラペラとページをめくつていたライくんだったが、特に興味も湧かなかつたのか、

唐突にパタンと閉じてしまう。

凶鑑に向けられていた無機質な瞳は、私を視界に入れた途端、温かみを帯びたような気がした。

「今日は鍛錬、しないの……？」

コテンと首を傾げる姿を見て、私はやっと思い出した。アルトさんが出かけてしまったことで油断していたが、この日はライくんが指導してくれる日だったのだ。

「ああー！ ごめん、わすれてた！」

すぐに準備するね、と凶鑑を受け取って着替えに走ったのだが、このやりとりですっかり忘れてしまったのだ。ライくんの気配が全くしなかったことを。

凶鑑を本棚に戻し、運動着に着替えた私は急いで庭へ駆けた。

わざわざ鍛錬を見てもらっているのに、そのことを忘れていたあげく、準備にも手間取るなんてしてはいけない。

しかし、そこにはライくんの姿はなかった。

それほど時間はかかっていないはず。温厚なライくんが、怒ってどこかへ行ってしまうなんてことも考えられない。

……急におなかที่痛くなったのだろうか？ 庭の中心に佇んで首を傾げる私は、再び驚かされることになった。

「……チナ、こっち」

後ろから突然肩を掴まれ、声をかけられた。二回目だというのに、私はまた驚いて飛び退っていた。

「ライくん、けはいがないよ！」

思わず叫んだ私のことなど気にする様子もなく、ライくんは頷いて言う。

「今日は、気配を消す練習」

そこから先のことは正直、思い出したいくない。簡単に説明を聞いただけでも、人間業ヒトノコトとは思えなかった。

それを軽々とやってのけ、私にも「できるでしょ？」と言わんばかりの態度でいるライくんが、心底恐ろしかった……。

ライくんが教えてくれた気配を消す方法は、こうだ。

まず、呼吸を抑える。空気を揺らさないように、小さく呼吸をするのだ。

これはまだ理解できる。生き物の呼吸音というのは、気配を感じ取る上で重要な部分だ。なんせ、そこで死んでいるか生きているか判断できるのだから。

私も、本気で集中する時には息を止めて周囲の呼吸音を探ることもある。これは訓練すればできるようになるはずだ。

次に、心臓の鼓動を抑える。

……どうやって？ というのが私が最初に抱いた感情だった。焦れば鼓動は速くなる。なら落ち

着けばいい。しかし、それでは足りないのだ。

平常時以下に、鼓動の大きさ、速度を下げなければいけない。そうすればもちろん血の巡りは悪くなるだろうし、体の動きにも影響が出てくる。そうならないために、即座に体の調子を最適に戻す訓練までしなくてはならない。

正直言って、何を言っているのか分からなかった。

最後に、周囲に溶け込むように自分の存在感を消す。

これは経験を積むのが一番だということで、私は森に放り込まれた。

自分は森の一部、木の枝にでもなったつもりで、ただそこに「ある」ことを意識する。自我を出してはならない。動いていいのは、風になびく時だけ。

たまに「私、何やってるんだろう……？」って気分になるが、そんなことを考えた時点で失敗だ。正直、できる気がしない。こんなの、人間にできることじゃない。

そうは思っても、実際にできてしまっている人が目の前にいるわけで……。

——その日は、なんの成果も得られずに一日を終えたのだ。

それから、気配を消して生活するライくんを度々見かけるようになった。

どうやら、ライくんにとってはこれが本来の姿だったようで、私と出会ってからは、私に合せて意識して存在感を出していたらしい。なんか、すごく特殊な人だな、と思った。

私が周囲の気配を敏感に感じ取れるようになったと判断したライくんは、それから徐々に気配が

薄くなっていったのだった。

気配が薄くなっているシエルと、最近は何感すら感じられなくなってきたライくん。改めて見てみると、二人の雰囲気はそっくりだ。

シエルは神獣の気配だけを消しているという。そんな違いはあるが、二人の気配の消し方はよく似ているように感じる。

今はシエルがすぐ近くにいると知っていたから気づけたが、知らなければ何か別の、無害な生き物があると認識していただろう。

シエルにしてもライくんにしても、安定した気配制御を、まるで呼吸をするように行っている。私にはまだまだ辿り着けそうにない領域だ。

しかし、私もライくんとの鍛錬で何も得られなかったわけではない。あの日から、雨の日も、風の日も、諦めずに特訓を続けてきたのだ。

自分でもはつきりと変わったなと言えるのは呼吸法だろう。最近は何切れもしにくくなったし、代謝が良くなったようにも感じられる。体が温まりやすく、動きも滑らかになった。これはアルトさんにも褒められたことなので、私の勘違いではない。

そして、以前より気配察知の精度が上がり、風の流れを読めるようになってきた。

まさか、気配制御を習得する過程で、こんなに周囲のことに敏感になるなんて……。思わぬ成果

ではあったが、どちらも気配制御する上で大事な要素であることは確かだ。周囲に溶け込むためには、その場の空気を即座に感じ取らなければならない。その上で役に立つことは間違いないだろう。最近はずに、音を立てない歩き方、走り方を特訓中である。

これまで以上に素早く足を動かし、地面に着くのは一瞬。それ以外は常に地面の数センチ上に浮いている意識で歩いたり走ったりするのだ。きつと、極めれば水面だって走れるようになるに違いない。私が目指すのは、忍者だ……！

まだまだ気配制御を習得しきれていない私ではあるが、少しずつできることは増えている。今回の戦闘では、それらを生かせたらいいのだが……。

さて、これから私が戦う相手、コルピッドは、今も散り散りになってむしゃむしゃと草を貪^{むさ}っている。

幸い、私たちはまだ気づかれていないようだ。

だが、今のうちに最初の一手を決めなければ、いずれ気づかれてしまうだろう。ライくんほどとは言えなくとも、アルトさんだって十分すぎるほど気配制御はうまい。それに比べ、私はまだまだ素人である。

気づかれるとすれば、確実に私だろう。

コルピッドの大きな耳はどんな小さな音も拾う。ここにいる全てを倒すには、同時に攻撃するか方法はないだろう。

しかし、今も動き回るコルピッドたちに確実な一撃を与えるコントロール力は私にはない。数匹逃がしてしまうのはやむを得ないか……。

頭の中で作戦を組み立て、シミュレーション。今はこれ以上の策は思いつかない。

呼吸を整え直し、今の私にできる最大限で気配を薄くする。風の流れを見極め、——走り出した。直感を信じて躊躇^{ためら}わずに獲物へ向かう。

まずは一番手前の一羽。最小限の動きで右手の短剣を振り下ろす。首筋を深く斬りつける手応えを感じて、次。

気づかれるか気づかれぬかの瀬戸際で、すぐそばにいた二羽に両手を振りかざす。片手に一本ずつ握った短剣は、左右の一羽ずつに命中。その流れのまま、奥にいた一羽も斬りつけた。……ま

ずは四羽。
ここで、私の存在に気づき逃げ出そうとするコルピッドが現れ出す。五メートルも離れてしまえば、私はもう追いつけなくなるだろう。その前に……足場を崩す。

地面に無数の凹凸を作り出すと、コルピッドたちがよく知っていた地形が、全く知らないもの

様変わりした。これによって、踏み出した一步は最大限の力を出せず、着地のタイミングもズレる。狙い通り、転ぶものや、戸惑うものが現れた。それらを確実に、一羽ずつ仕留めていく。

私にはなんの障害でもない小さな凹凸は、体の小さなコルピッドにとっては、大きな障害となり得た。

私の作戦勝ちだ。……とは言っても、私のスピードでは追いつかず、三羽ほど逃がしてしまったようだ。最後に駄目元で魔法を撃ち出すべきだっただろうか……？

辺りが静まり返り、無意識に呼吸を止めていたことに気がつく。肺に残っていた空気を全て吐き出し、血のおいの混じった空気を吸い込んだ。

「惜しかったね。いい作戦だったけど、最後までうひと押し欲しかったな」

いつの間にか近くまで来ていたアルトさんが、倒れたコルピッドを回収していく。どうやら、及第点は得られたらしい。

「さあ、戦いのおいを嗅ぎつけた次の魔物が来るよ」

回収を済ませたアルトさんは、そそくさと元の位置に戻っていく。一瞬にして気配が消えた。

意識をアルトさんから向かってくる魔物に移し、集中する。今度は、悠長に作戦を考えている時間はないさそうだ。

ドスドスと足音を鳴らして向かってくるのは、イノシシ型の魔物、ストーンボアだ。

名前の由来は実に直感的で、石頭のイノシシという意味らしい。

しかし、硬いのは頭だけではない。なんとこのストーンボア、全身の皮までカチカチに硬いのだ。生半可な力じゃ傷一つ負わせられない。

つまりどういうことか。……力の弱い私には、天敵とも言える存在なのだ。

物理攻撃じゃ、私は手も足も出ない。ストーンボア相手に、短剣の出番はないだろう。

ストーンボアの恐ろしいところは、猪突猛進。力強い足取りで獲物に向かってまっすぐに突進し、石頭で攻撃する。その威力は計り知れず、鍛えている成人男性であっても軽々と吹き飛ばされてしまうのだ。

私なんて、直撃したら星になってしまいかもしれない。ちなみに、このストーンボア、曲がることはできないので避けるのは案外簡単らしい。

遠目に見えていたストーンボアは、もう目前まで迫っている。

まずは、どこまでもまっすぐに突き進むあの脚を止めたい。私は、ストーンボアたちの前に分厚い土壁を築いた。

その後、大きな衝撃音とともに土壁が崩れ落ちる。弾けるように飛んできた土壁の破片が、常に私を覆っている結界に弾かれる。破片や粉塵で遮られた視界を風で払うと、そこにはふらついているストーンボアが三頭いた。

ちゃんと脚は止められたようだ。それに、脳震盪を起こしているようである。これはラッキーだ。このチャンスを無駄にはしない。

私は、ウォータージェット改め、水刃をストーンボアに向かって放つ。ウォータージェットだとレーザー光線のようにどこまでも伸びそうで怖かったので、咄嗟に回転ノコギリのような形状に変えたが、どうやらうまくいったようだ。

同時に三つ放った水刃は、二頭に命中。ゴトリと頭が落ちた。……威力が強すぎたらしく、切断

してしまったようだ。最後の一文はわずかに軌道を外したが、首筋は切れていたらしい。しばしよろけた後、ドスンと大きな音を立てて体が崩れ落ちる。

なんとかうまくいって良かった。魔法の威力調整は今後の課題だな。なんでも切れすぎしてしまうのは困る。ストーンボアに向かっていった水刃は、勢い余って地面をえぐっていた……。

……なんて、気を抜いてしまったのが良くなかった。

倒したと思いついでいた三頭のうち一文が、最後の力を振り絞って立ち上がったのだ。そこから動きは速かった。

首筋から血を垂れ流し、怒りを目に宿したストーンボアが、まっすぐに私の方へ向かってくる。頭を下げて攻撃体勢に入ったその姿が、視界いっぱい広がった。

——ドスン！

やってきたのは突き飛ばされる衝撃ではなく、巨体が倒れた音だった。

……力尽きたのか？ と思ったが、どうやらそうではない様子で。倒れたストーンボアの向こう側に、剣についた血を振り払うアルトさんの姿が見えた。

「詰めが甘い。油断は禁物だって、何度も言ったはずだよ」

「……ごめんなさい」

「怪我はないね？」

私が常に結界で自分を覆っていることなんて知っているはずなのに、膝をついて目線を合わせて

心配してくれる。その優しさと、心配させてしまった不甲斐なさと、涙が滲んだ。

「反省は後でね。最後は大物だよ」

アルトさんは私の無事だけ確認して、次の魔物との対戦のために場を整える。

そしてやってきたのは、私がミカンと出会う直前に戦った、いや、あれは戦ったとは言えない……襲われる恐怖で魔法を暴発させ、周囲を破壊し尽くした後に大泣きしてしまった、私の黒歴史。あの時と同じ、クマ型の魔物。

——グランウルスだ。

……やっぱりアルトさんは鬼だと思う。

ドスン、ドスンと地響きを起こしながら向かってくる小山のような巨体。グランウルスと対峙するのは今回が二度目となる。

ビシビシと向けられる殺気に、一年半前の恐怖心が一瞬蘇り、背筋がブルツと震えた。

高まる緊張感。湧き上がる高揚感。以前と同じ醜態を晒すことはもうしない。一年半の間、必死に特訓してきた成果を、発揮する時がやってきたのだ。

血のおいに興奮しているグランウルスは目を爛々と輝かせながら悠々と歩いてくる。あまりにも余裕のあるその姿に多少の苛立ちを覚えるが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

私は深く息を吐き出し、心を落ち着かせて集中力を高める。全ての神経をグランウルス一体に向けてるように、目の前の敵を睨みつけた。

グランウルクスの最大の武器は、太く鋭い爪と牙だ。

丸太のような太い脚から生える爪は、まるで丁寧に磨かれたナイフのように鋭い。

あらゆるものを突き刺し、えぐるだけでなく、その圧倒的な腕力をふるえばどんなものだって切り裂くことができる。人より太い木の幹ですら、グランウルクスにかかれれば簡単に切り倒されてしまうのだ。

そして、大きな口にびっしり生え揃った牙。

その鋭さに顎の力も相まって、噛みつく力はワニにも劣らない。強靱な皮を持つストーンボアすら、グランウルクスには敵わないのだ。

グランウルクスの食事後には何も残らないと言われるほど、どんなに硬い骨だってバリバリと噛み砕いてしまう。

私の結界は、グランウルクスにだって傷をつけられることはないと言いつつ、用心するに越したことはないだろう。それにこの結界は、盾のように構える結界ではなく、全身を保護するように覆うタイプの結界のため、攻撃を受ければボールのように転がされ、おもちやにされる未来が簡単に見える。

今思えば、冒険者になったばかりの私にこの凶悪なグランウルクスの相手をさせるなんてどうかしているが、あの経験があつたからこそ今の私がいるとも言える。

最初の段階で挫折を知つたのは、結果的に良かったのだ。もしかしたらカイルさんたちも、それ

を想定していたのか……。

なんとなく感慨深い気持ちになる。そして改めてどうやってこの敵を仕留めようか頭を巡らせた。そうしている間にも、グランウルクスは目を血走らせて迫ってくる。

血のにおいが充満するこの場所で、獲物は小さな私が一人。おなかを空かせてやってきたグランウルクスからすれば、食べごたえのなさそうな小娘一人しかいないのかと腹が立つことこの上ないだろう。

苛立ち混じりに振り上げられた手は、まっすぐ私に向かつて落ちてきた。

横跳びでそれを難なく避けると、ドシン！ と大きな音を立てて丸い手が地面に叩きつけられる。掘ったわけでもないのに地面がへこむほどの威力を目の当たりにして私は身震いした。やはり、この攻撃は受けたくない。

すばしっこく逃げ回る私を捕まえようと、グランウルクスは素早い動きで何度も腕を伸ばす。

この巨体には見合わない素早い動きも、グランウルクスの恐ろしいところだ。私も負けじと、身を屈めて素早く逃げる。

いつまでも捕まらない私に痺れを切らしたのか、グランウルクスは大きな咆哮を上げた。ビリビリと痺れるような感覚に、体の動きが鈍くなる。

その隙をつくように、大きな口を開けたままのグランウルクスが迫ってきた。どうやら噛みつくつもりようだ。